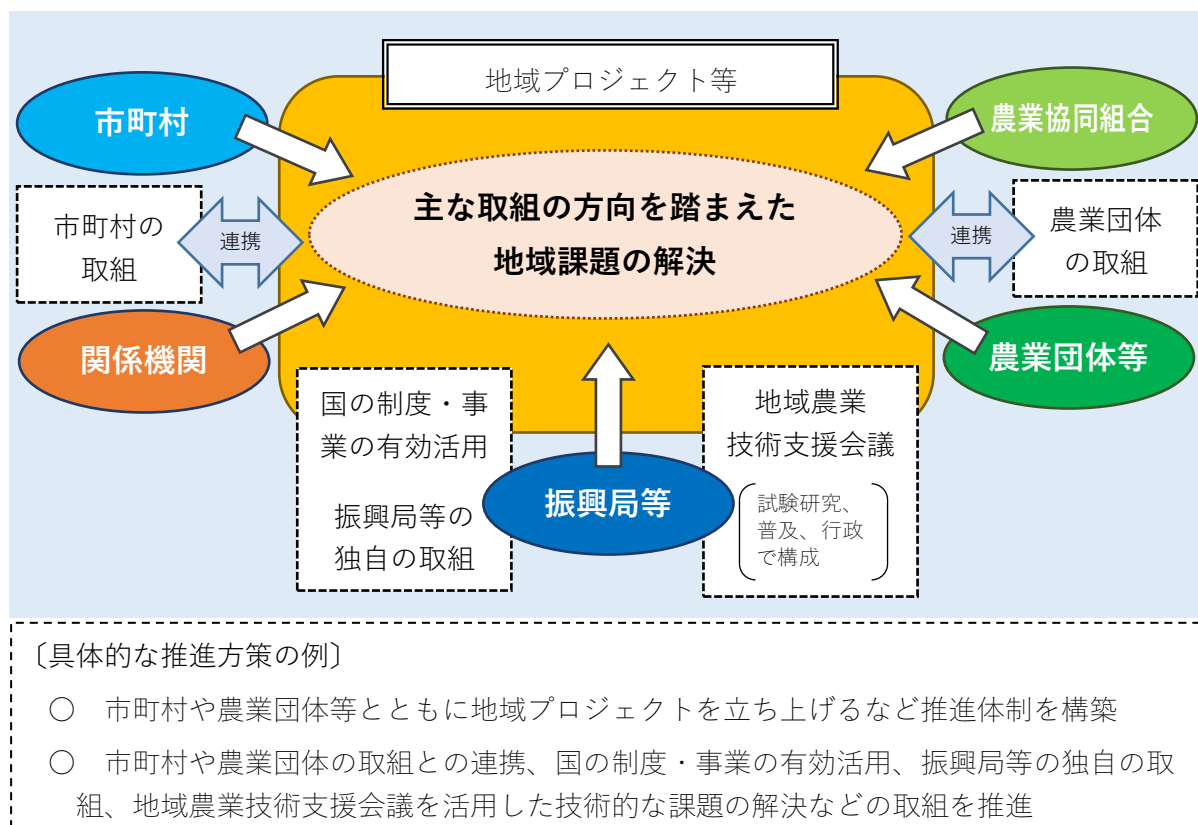


第4章 地域農業・農村の「めざす姿」と主な取組の方向

1 「めざす姿」の位置付け

この「めざす姿」は、振興局等が、農業者や市町村、農業団体等の地域関係者とともにおおむね10年後を見据えた地域農業・農村の目指すべき将来像と、その実現に向けた主な取組の方向を検討し、明らかにしたものです。

この検討を通じ、地域関係者の間で、改めて取組の方向についての認識の共有を図ったところであり、「めざす姿」の実現に向けては、今後更に地域ぐるみで具体的な取組を検討し、推進することとしています。



2 地域農業・農村の「めざす姿」

振興局等を基本とした12地域の農業・農村の「めざす姿」とその実現に向けた主な取組の方向を提示します。

空知地域

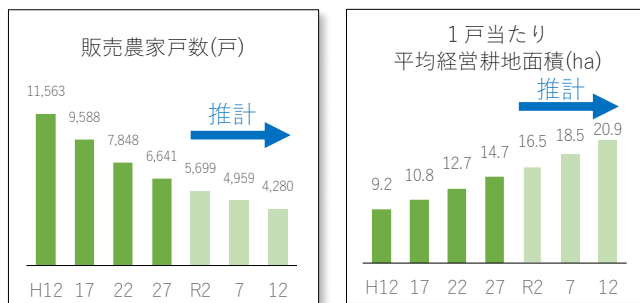
1 地域農業の特色

- 空知地域は、全道の耕地面積の約10%を占めており、豊かな水資源と広大な農地を活用し、全道一の作付けを誇る稲作を主体にして、小麦・大豆など土地利用型の畑作や野菜・花きなどの園芸を取り入れた多様な農業が展開されています。
- 管内の農業産出額は1,011億円（H30）で、米の割合が最も高く487億円（全道1位）、次いで野菜が284億円、畜産が105億円、畑作が74億円となっており、北空知・中空知地域で米の比率が高く、南空知地域では野菜類や畑作物の割合が高くなっています。
- 効率的・安定的な農業経営の確立を図るため、管内各地域でICTなどの先端技術を用いたスマート農業技術や省力化栽培技術の導入に向けた実証試験が行われています。



2 現状と課題

- 良食味米のほか、加工用米など多様なニーズに対応した米づくりが展開されていますが、食文化の多様化や農家戸数の減少などにより水稻作付面積は減少傾向にあります。
- 管内は高齢化率50%以上の集落数が道内で最も多く、労働力不足や後継者不足などがあいまって農家戸数が減少し、販売農家1戸当たり平均経営面積が拡大しているほか、農村の集落機能や多面的機能の低下が懸念されています。



資料：農林水産省「世界農林業センサス」、「農林業センサス」、道総研農業研究本部「2015農林業センサスを用いた北海道農業・農村の動向予測」

3 地域農業・農村の「めざす姿」

北海道の米生産をリードする魅力ある空知水田農業

- 空知の強みである生産性の高い水田をフル活用し、スマート農業技術などの導入による省力化と空知産農産物のブランド力の向上により、魅力ある空知水田農業が展開され、北海道の米生産をリードしています。
- 経営感覚に優れた担い手と多様な人材が活躍し、農業経営体の持続的な発展と地域の成長を力強く支え、農村に活力を与えています。

4 「めざす姿」の実現に向けた主な取組の方向

(1) 水稻を基本とした複合経営の確立と農家所得向上

- 高品質な空知産米の安定生産と水稻作付面積の維持・確保に努めるとともに、空知産米の更なるブランド力向上と消費拡大を図ります。
- 低コスト・省力化技術の導入とともに、土地利用型作物を主体とした適正な輪作体系の確立や野菜・花きなどの園芸作物の安定生産を推進します。



管内各地域のブランド米



GI登録された夕張メロン

(2) 担い手の育成と多様な人材の確保

- 優れた経営感覚を備えた農業経営者の育成と就農間もない農業者の早期経営安定化を図るため、経営力や技術力を向上させる実践的な研修や地域でサポートする取組を推進します。
- 雇用人材の確保に向け、他産業や他地域と連携し、農福連携や援農マッチングなど多様な人材の受入に向けた取組や、就業条件の整備など、雇用の改善につながる対策を進めます。



新規就農者などを対象にした研修会



サラリーマン層を対象にした援農ボランティア

(3) 空知農業を支える基盤整備とスマート農業の推進

- ほ場の大区画化・汎用化、排水対策、地下かんがい施設の整備など、生産力強化、防災・減災につながる基盤整備を計画的に推進します。
- 関係機関との連携・協働体制を構築し、スマート農業に関する情報の共有や人材の育成などを進め、水田の水管理システムやロボット農機など、地域や個々の営農に応じたスマート農業技術の着実な導入を促進します。



基盤整備事業によるほ場の大区画化

事例： 岩見沢市と新十津川町では、スマート農業技術の実証プロジェクトを実施



岩見沢市では、水稻の生産コストの削減と農家所得の増加を目指し、自動給水弁等の実証やセンサネットワークの構築などを進めるとともに、5G技術を用いて自動走行トラクターなどの遠隔監視制御の実用化に向けた実証も開始。



新十津川町では、家族経営をモデルとした高品質・良食味米生産を実現する技術体系の確立を目指し、自動化技術やリモートセンシングデータの活用などを実証。将来の担い手となる子どもたちに農業の魅力を知ってもらうための普及啓発活動も幅広く展開。

(4) 持続可能で活力に満ちた農村の確立

- 食・滞在・体験等を提供する農村ツーリズムの推進など、都市・農村交流の促進により交流人口の拡大を図るとともに、農業の魅力を将来の担い手に積極的に発信し、持続可能な農村の構築を推進します。
- 多面的機能を支える地域の共同活動を促進するとともに、中山間地域等における生産活動を継続するための取組を推進します。

石狩地域

1 地域農業の特色

- 石狩地域は、6市1町1村からなり、全道人口の44% (237万人) が集中する大都市圏を形成しており、都市近郊の利点を活かした農産物の直売、農業体験などが盛んに行われています。
- 石狩川などの豊かな水を利用して、稲作を中心に発展してきましたが、昭和45年(1970年)の米の生産調整を契機に、小麦や豆類などの畑作、野菜、花きを含めた複合経営が進展してきました。
- 販売農家1戸当たりの平均経営耕地面積は13.8haと、比較的小規模な経営が展開されています。



区分	単位	石狩	全道	摘要
耕地面積 (平均経営耕地面積)	万 ha	4.1 (13.8ha)	114.7 (23.8ha)	H27 年
総農家戸数 (販売農家戸数)	戸	3,105 (2,359)	44,433 (38,086)	H27 年

資料：農林水産省「耕地及び作付面積調査」、「農林業センサス」

2 現状と課題

- 米や小麦などの土地利用型作物と、ブロッコリーや花きなどの園芸作物との大きく分けて2つの経営形態があり、規模拡大の意向がある農業者も多く、1戸当たり経営耕地面積が拡大しています。一方で、畜産経営を含め、現在の農業生産の主力を担う農業者の高齢化が進行していることから、農家子弟や新規参加者が地域へ安定的に定着しないと、担い手不足による地域力の低下が懸念されています。
- 都市近郊で農業が展開されており、安定的な農業生産の維持には、地域にあった生産方式と技術の導入、共同施設整備や働きやすい環境づくりが求められています。

3 地域農業・農村の「めざす姿」

地域を大切に、地域から期待される都市近郊農業

- 都市近郊という立地を活かし、地域の農産物の直売活動や農業体験などを通じて、地域資源である「農」と「人」の結びつきが深まっているとともに、地域とのつながりが強化され農業者の「つくり・伝える」楽しみが増す、魅力ある地域農業が展開されています。
- 多様な担い手が経営形態に即した農業生産基盤づくりとICTなどのスマート農業技術を選択でき、多種多様な農業生産体制が整備されています。
- 女性の新規参入や経営参画、若手農業者や多様な人材の力を活かした法人化、円滑な第三者経営継承が行え、農業が地域コミュニティを支える環境が整っています。

4 「めざす姿」の実現に向けた主な取組の方向

◎共通

○担い手や多様な人材の確保の取組

- ・スマート農業技術などを活かし、農地や農業技術が次世代の担い手へ円滑につながるよう、農業技術のデータ化など地域関係者間の情報連携を図ります。
- ・女性の新規就農やパートナーの経営参画を推進します。
- ・地域農業を担う人材の確保に向けた取組と法人化や第三者経営継承に向けた検討を推進します。
- ・地域のリーダーづくりとともに、短期労働者とのマッチングや農福連携などの多様な人材の確保を推進します。
- ・農業や関連産業が就職の選択肢として選ばれる地域農業の情報発信を図ります。



女性単独就農予定の農業研修生と北海道指導農業士

○都市近郊農業を活かした取組

- ・地場産品の供給場所であり、地域住民と農業者との交流拠点となる直売所の維持発展を推進します。
- ・大消費地への供給を支える地域の農業と農産物の認知度向上とともに、消費者や食品加工事業者等のニーズに応える生産体制などの確立を推進します。
- ・農業体験や農産物の加工などを通じた関係人口の増加と農業者のやりがい活動を支援します。
- ・次世代につなげる食育活動により、幅広い年齢層へ向けた地場産品の理解促進を図ります。



交流拠点となる直売所

◎石狩北部

- ・良質米産地としての生産体制の維持を図ります。
- ・花きやミニトマトなどの園芸作物の生産を通じた、新規就農者や高齢農業者などの担い手の確保を推進します。
- ・田畑輪換などの輪作による土地利用型農業を推進します。
- ・区画整理などの土地基盤整備の推進を図るとともに、地域の主要な作物である水稻等における水田の自動給水、リモートセンシングなどスマート農業技術を活かした生産性の高い農業づくりを推進します。

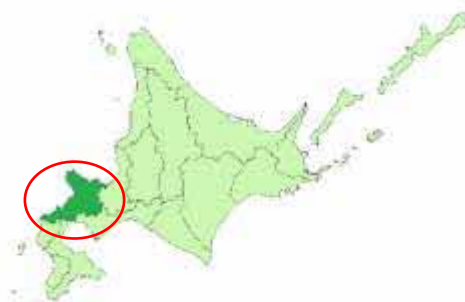
◎石狩南部

- ・米、小麦などの大規模土地利用型農業やブロッコリーなどの園芸作物を組み合わせた複合経営に即した生産体制の維持を推進します
- ・畑作物などにおける機械化や、可変施肥、リモートセンシングなどのスマート農業技術を活かした省力化、効率性の高い農業と規模拡大を目指す農業者への農地集積・集約化を推進します。
- ・共同化や法人化などによる畑作・畜産経営等の生産の維持拡大を図ります。

後志地域

1 地域農業の特色

後志地域は、日本海側気候に属し、全般的には春から夏にかけて温暖、冬はニセコリゾートのパウダースノーに代表されるように降雪が多くなっていますが、複雑な地勢のため、地域によっては気候が大きく異なり、それぞれの地域で特色あるブランドが展開されています。



温暖な気候により果樹栽培が盛んな地域で、りんごやおとう、ぶどうなどに加え、ミニトマト、パプリカ、花きなどの施設園芸も主要品目となっています。

比較的降雪が少なく、主に、水稻、すいか、メロン、生食用馬鈴しょやスイートコーンが栽培されています。



道内でも有数の豪雪地帯で、生食用馬鈴しょなどの畑作に加え、だいこんやにんじん、ゆり根、アスパラガスなどの全国屈指の産地であり、酪農や種馬鈴しょなどの生産が盛んな黒松内町、道内有数の良食味米生産地として有名な蘭越町などもあります。

2 現状と課題

後志管内の農家人口は、令和12年（2030年）までに約3割の減少が推計されているほか、管内の総人口についても大幅な減少が見込まれており、担い手を含む人材の確保が懸念されています。

さらに近年、エゾシカやアライグマなどの鳥獣による農作物被害が深刻化しています。

3 地域農業・農村の「めざす姿」

多様な人材の活躍によるブランド力ある後志農業

省力化や効率化とともに多様な人材が活躍することで、農家1戸当たりの生産量が増加し、地域全体の生産量が維持されています。また、高品質化・安定供給が更に進み、地域農産物のブランド力が一層高まっています。

<各地域のブランド強化の推進方針>

○ 北後志地域【果樹産地の維持・発展、ミニトマト等の高品質・安定出荷】

果実類は、今後の温暖化傾向を見据えながら、新品種の導入などを行い、果樹産地の維持・発展を目指します。また、全道一の生産量を誇るミニトマトを中心とした野菜類の一層の高品質・安定供給を目指します。

○ 岩宇地域【「らいでん」ブランドの強化】

水稻、すいか、メロンなどの高品質・安定生産を維持することにより、「らいでん」ブランドの強化を目指します。

○ 羊蹄山麓・南後志地域【「ようてい」ブランドの強化】

生食用馬鈴しょやだいこん、にんじんなどのより効率的な生産体制の構築を図ることにより、「ようてい」ブランドの強化を目指します。

また、「らんこし米」ブランドを強化し、収益の向上・安定を目指します。

4 「めざす姿」の実現に向けた主な取組の方向

後志地域のブランドの強化を図るため、人材確保などの各種課題の解決に向け、次の取組を展開します。

(1) 多様な担い手や人材の確保・育成

- 親子間継承などをより一層促進するための環境を整備します。
- 新規参入希望者に対する関係機関が連携した一貫的（相談、研修、就農、定着）な受入体制を整備します。
- 生産性向上や労働負担の軽減につながる営農支援組織の育成や協業化・法人化を推進します。
- 他産業を含めた関係機関の連携による人材マッチングの取組を推進します。

◆「多様な人材の確保」に関する取組

振興局と関係機関において雇用人材確保に向けたマッチングシステムを構築し、地域が求める多様な人材（ニセコリゾートの外国人など）を確保する一助となっています。



(2) 生産基盤等の整備と生産性・作業性の向上

- 計画的な担い手への農地集積や、基盤整備による農地の大区画化を推進します。
- ドローンによる農薬・肥料の散布やハウスの環境制御技術など、地域実態に即したスマート農業技術の普及を推進します。
- スtockマネジメントの取組など、共同利用施設の老朽化対策を推進します。
- ジャガイモシストセンチュウのまん延防止など、病害虫の防除対策を徹底します。
- 低コスト・省力化技術の導入促進や新品種の普及・定着を図ります。
- 後志地域農業技術支援会議を活用し、地域農業が抱える技術的課題解決に向けた総合的支援を図ります。

(3) 高付加価値化農業の推進

- SDGsの目標達成にも貢献するクリーン農業やGAPを推進します。
- ニセコリゾートなどの観光と連携した地域食材の活用を推進します。

◆「高付加価値化農業の推進」に関する取組

全道の産地に先駆けて栽培が始まった仁木町産シャインマスカット「ブランド名：ラ・ラ・シャイン」は、クリスマスなどの需要期出荷による高価格販売を実現するとともに、管内でも販売されており、ニセコリゾート客からも好評を得ています。



(4) 鳥獣被害防止対策

- 地域の農業被害の実態に即した効果的な被害防止対策を支援します。
- 外来生物であるアライグマの根絶に向けた捕獲を推進します。

胆振地域

1 地域農業の特色

○ 胆振地域は、東西に約150kmと長く、冬は温暖、夏は冷涼な気候を活かし、比較的経営規模は小さいものの、「北海道で採れて胆振で採れない農産物はない」と言われるほど、バラエティに富んだ生産が行われています。



○ 白老町以東に位置する胆振東部は、水稻が中心であり、高品質米である地域ブランド「たんとうまい」の主産地となっています。また、レタス・トマトなどの施設野菜、メロン、かぼちゃ、花き、和牛、ハスカップ、軽種馬の生産も盛んです。

○ 登別市以西に位置する胆振西部は、温暖な気候を活かして露地野菜、高級菜豆、果樹、水稻など多種多様な農作物が生産されています。また、酪農・畜産も営まれています。

○ 農業従事者の高齢化が進んでいる地域である一方で、

初期投資が比較的少ない野菜生産の好適地であり、生産者が主体となった就農受入体制の構築が進んでいることなどから、新規就農者に占める新規参入者の割合が高い地域となっています。

項目	胆振	全道	摘要
一戸当たり平均経営耕地面積	13.2ha	23.8ha	平成27年
農家人口のうち65歳以上の割合	40.2%	33.7%	平成27年
新規就農者に占める新規参入者の割合	42.2%	22.1%	過去5年(平成27年~令和元年)累計値を基に算出

資料：農林水産省「農林業センサス」

北海道農政部農業経営課「新規就農者実態調査」

2 現状と課題

○ 農家戸数の減少や高齢化により、耕作放棄地の増加や生産基盤の脆弱化、集落機能の低下が懸念されています。

○ 一戸当たりの経営面積が拡大しているため、労働力不足が課題となっているほか、機械の大型化により生産体制の強化を図るなど、経営の効率化を進める必要があります。

3 地域農業・農村の「めざす姿」

「食の宝庫」を活かして稼ぐ いぶり農業

○ 意欲ある担い手への農地集積・集約化により、農地が効果的に維持されており、経営の効率化が図られ、高い農家所得を実現しています。

○ 地域が一体となった新規参入者の受入が進むとともに、農福連携などによる多様な人材の就農機会がつけられており、安定した担い手・人材の確保が図られています。

○ ウポポイ（民族共生象徴空間）などの地域資源や様々な分野と連携し、バラエティに富んだいぶり農業・地域農産物の魅力が広く浸透しています。

4 「めざす姿」の実現に向けた主な取組の方向

(1) 農家所得の向上

- 水稻の高密度は種・短期育苗など省力化栽培技術の導入や、自動操舵システムやUAV（無人航空機）を活用した肥料・農薬の散布など個々の経営実態にあったICTの導入により、更なる省力化と労働力の再分配を推進し、経営効率の向上を図ります。
- 担い手への農地集積・集約化や、生産性向上や高収益作物への転換促進につながる農地の大区画化・汎用化などの農業生産基盤整備を推進します。
- 畜舎（農場）への伝染性疾病侵入防止対策や家畜の損耗防止につながる取組を推進します。



基盤整備事業によるほ場の大区画化
(厚真町)

(2) 安定した担い手・人材の確保

- 各地域での研修・受入れ体制を有効活用し、地域間の連携を強化することで、胆振管内全体での地域への定住と農業への就業を推進します。
- 農業生産現場の労働環境改善や農福連携、外国人材の活用を進め、多様な人材を確保します。
- 多面的機能を支える共同活動への支援など、集落機能の維持向上につながる取組を進めるとともに、快適で魅力ある農村環境づくりを推進します。



多面的機能直接支払交付金を活用
した植栽活動（洞爺湖町）

(3) いぶり農業の魅力発信

- 観光と連携した地域食材の活用促進や、和牛、ハスカップ、メロン、有機農産物など地域を代表する製品のブランド力強化、消費者と農業者を結び付ける取組を通じて、地域農産物の魅力を効果的に発信します。
- 観光業など多様な主体と連携し、都市と農村の交流拡大を進めることにより、農業・農村に対する理解促進を図るとともに、地域の活性化を推進します。

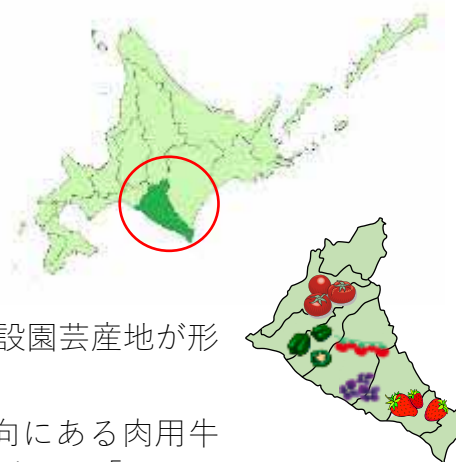


都市部からの教育旅行を積極的に
受け入れている「そうべつくだもの
村」(杜警町)

日高地域

1 地域農業の特色

- 日高地域は、国内生産頭数の約8割を占める全国一の軽種馬生産をはじめ、稲作、施設園芸や酪農、肉用牛生産などの多様性に富んだ農業が展開されています。
- 管内の施設園芸は、野菜・花き類ともに全国的にも高いシェアを誇り、安定出荷によって市場などから高い信頼を得ているとともに、地域ごとに特色ある施設園芸産地が形成されています。
- 軽種馬生産からの転換や複合化などにより増加傾向にある肉用牛は、素牛生産が多くを占めているものの、「びらとり和牛」や「みついし牛」などの地域を代表するブランドを確立しています。



2 現状と課題

- 稲作については、高齢化の進行及び著しい後継者不足により、水田地帯の農家戸数は減少しているため、一戸当たりの平均耕地面積及び作業負担は増加しており、水稻作付面積は草地、飼料作物への転作を主として減少傾向にあります。
- 施設園芸野菜については、近年、新規就農者を一定数確保しており、野菜の作付面積は拡大しています。一方で、地域の人口減少や通年雇用ではないなどの条件から他業種との競合に弱く、雇用人材が慢性的に不足している状況です。
- 畜産（軽種馬、酪農、肉牛）については、就農時における初期投資が多額であることから、新規参入者の確保が進んでおらず、また、一部地域でヨーネ病の発生が続いています。

3 地域農業・農村の「めざす姿」

未来へつながる、魅力あふれる日高農業

- 現状のおおむね9割以上の水稻作付面積を確保し、将来にわたって農業水利施設等が有効活用され、地域の生産力を維持するとともに、美しい農村風景を形成しています。
- 施設園芸、畜産及び畑作については、現状と同等以上の生産規模（作付面積・生産量・飼養頭数など）が維持され、ブランド力の高い農産物を安定的に供給することで、市場や消費者などからの需要と信頼に応えています。
- スマート農業をはじめとした新技術や新品種の導入が進み、生産力と収益力の高い魅力ある農業を展開しています。
- 地域の実情に応じた新たな就農形態や経営継承によって農業経営者の円滑な世代交代が進み、特色のある地域農業を将来にわたって継承しています。
- 働きやすい魅力のある農業現場で、担い手とともに雇用人材などの担い手を支える人材が生き生きと活躍しています。

4 「めざす姿」の実現に向けた主な取組の方向

- 水田地帯における作付面積の減少を食い止めるべく、地域の農業者による作業の共同化などの効率的な手法について管内外の実践事例の調査分析を行い、横断的な展開を推進します。

【事例】

様似町では、複数戸の水稻複合経営者が水田部門の農作業に係る共同利用組合を設立、町単補助を活用して農業作業機械を整備し、作業の共同化を実施しています。



- ドローンによる水田防除や園芸施設環境計測・制御システムなどのスマート農業技術をはじめとした新技術や新たな知見の共有や普及を推進します。特にスマート農業については、日高管内でのモデルケースの育成を推進します。
- 「国際的に通用する強い馬づくりと日高の軽種馬生産のめざす姿（軽種馬生産構造改革推進会議）」に基づき、優良な繁殖牝馬及び種牡馬の計画的な更新と導入をはじめ、地域の既存施設を活用した研修会の実施による飼養管理技術や育成調教技術の高度化、新技術の導入による良質な飼料生産などに取り組み、強い馬づくりを推進します。
- 地域内外での雇用人材の掘り起こし対策事例の横断的な展開を図るとともに、他産業と比較しても遜色のない就労環境の実現に向けた取組を推進します。
- 既存の経営資産の有効活用や新規就農者の育成・確保に向け、地域内外の実践事例の調査分析により、地域の実情に合った「ひだか型第三者経営継承」などの手法確立に取り組みます。また、後継者確保のためには、経営の安定及び経営資産の維持が重要であることから、農業保険への加入を促進します。

【事例】

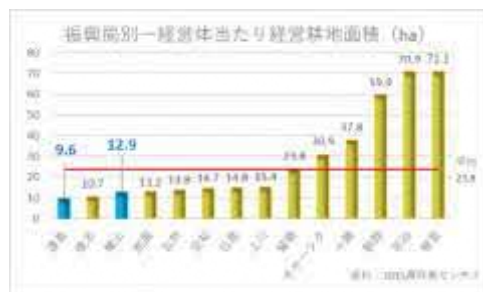
施設園芸などの新規就農者を確保できている作目以外においても、地域における第三者経営継承のモデル農家を選定し、円滑な資産継承の仕組みづくりなどを地域関係機関において検討を進めています。

- 家畜伝染病の発生・まん延防止のため、地域の関係機関が連携した実践的な防疫訓練を実施します。また、一部地域で発生しているヨーネ病については、地域関係機関が一体となり感染牛の摘発・とう汰及び発生施設の清掃・消毒などの対策を徹底します。

渡島・檜山地域

1 地域農業の特色

- 渡島・檜山地域は、温暖な気候を活かし、渡島地域では、稲作、畑作、野菜、果樹、花き、酪農、畜産など殆ど全ての農産物を網羅し、檜山地域では、水稻や馬鈴しょを中心に豆類や野菜、酪農など、地域ごとに特色ある農業が営まれています。
- 経営規模は全道平均を下回るものの、バラエティに富んだ農産物を生産しており、トマトや長ねぎ、にら、さやえんどう、カーネーションなどは全道有数の産地で、道南生まれの「ふっくりんこ」や渡島・檜山共通の「函館育ち」などの広域ブランド、地理的表示（GI）を取得した「今金男しゃく」などの地域ブランドを有しています。
- 新幹線や空港、歴史・文化の観光地など、様々な地域資源にも恵まれており、ワイナリーや酒蔵、植物工場など、他業種や国外の資本等の参入が実現しています。



2 現状と課題

- 農家戸数の減少や高齢化の進行に加え、地域の人口減少などを背景に、生産現場での労働力不足が顕著となっており、地域の生産力やブランド力の維持に支障を来すおそれがあります。
- 様々な農産物が生産されている中、小規模な経営の安定化を図るためには、生産性の向上に加え、付加価値の高い生産販売を進める必要があります。

3 地域農業・農村の「めざす姿」

小さくとも「キラリと輝く!!」道南農業

- 農業生産基盤の強化による生産性の向上と担い手への農地の集積が進むとともに、広域的な集出荷体制のもと、野菜や花きなどの高収益作物の生産が拡大しています。
- スマート農業技術を活用した効率的な農業経営が展開されているとともに、多様な人材や、TMRセンターなどの営農支援組織が安定した農業生産を支えています。
- 地域の醸造用ぶどうや酒米を活用したワイナリー・酒蔵をはじめ、食や観光、企業や教育・試験研究機関等、様々な分野や組織が連携して地元密着した取組を進め、地域が活性化しています。
- 客観的な認証制度の取得などにより、消費者としっかりとした信頼関係を築いており、地域ブランド力を一層高めています。